



日口交流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page: <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンション401号

Tel: 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



エカテリーナ・エフセエワさんの講演会に寄せて

榛葉 由香理

今回のオンライン講演会では、サントペテルブルクと日本をオンラインで繋ぎ、エカテリーナ・エフセエワさんから日本とロシアの架け橋となる活動についてお話を頂きました。この講演の中で大きな気付きとなった点が二つありました。

一点目は、日本の文化とロシアの文化がコラボレーションすることに対する興味深さです。

エカテリーナ・エフセエワさんは日本の伝統芸能である早池峰神楽をモスクワのエルミタージュ劇場で披露することにご尽力されていました。この公演は、日本の生活の中心と言える稲作と密接に結びつき、日本の人々の間で傳承されている“ハレ”の行事をロシアに広く伝えるきっかけとなりました。この活動について、私はこの土着の文化とも言える早池峰神楽をエルミタージュ劇場というロシアの貴族文化が作り上げた場で行うことそのものが非常に興味深いと感じました。というのも、日本の非常に庶民的で人々の根幹にあった神楽がエルミタージュ劇場というロシアの貴族文化の建築物と組み合わせることは、日本で行われる早池峰神楽の公演とは異なる感慨深さをもたらすように思えたからです。またこのコラボレーションを実現するにあたり、日本の文化をあるがままに伝えようとする早池峰神楽演者とロシア側の関係者



エカテリーナさん

の方々の努力がひしひしと伝わりました。特に、早池峰神楽で使用する竹を用意するために、サントペテルブルクの植物園から竹を切り取ったというエピソードは、ロシア側の関係者の方々と日本側の関係者の方々の文化を丁寧に扱おうとする心配りを感じました。このような活動は、日口交流協会の朝妻さんや益田さんからご支援頂いている日露学生会議での日本とロシアの国際交流イベントに携わる私にとって非常に心を打たれるものでした。

二点目は、本講演会を通して自身の生まれ住む土地の文化を再認識した点です。私は寡聞にて恐縮ではありますが、エカテリーナ・エフセエワさんの講演を拝聴するまで早池峰神楽の存在を知りませんでした。しかし、本講演を通して早池峰神楽の存在を知り、自身が生まれ育った土地についてよく知っているという過信があることを悟りました。また、国際交流の場において、単に相手の文化を知るだけではなく、他者の視点を介在して自らを再認識することができることを実感致しました。私たちが日々の生活の中で、自身の姿を他者との対話の中から理解するように、日本という自身の生まれ育った土地の文化をバックグラウンドの異なる方からの視点によって再認識するきっかけとなりました。

国際交流のもつ意義は単に相手の文化を知るだけにとどまらず、自身について新たな視座で理解し、新たな可能性を生み出すことでもあり、これらを総じて「架け橋」と言えるのだと実感いたしました。私は来年度から社会人となりますが、ロシア語という言語を学び、国際交流に尽力した経験や、本講演会での気付きを忘れず、学生時代とは異なる形にはなるものの、国際交流の事業やイベントに対して自身が積極的に関与していく意識を新たにしました。(上智大学外国語学部ロシア語学科学部4年、日露学生会議財務委員)

お知らせ

●ロシア語クラス生徒募集中!

水曜: 初級2 (18:00~19:00) 初級1A-1 (19:05~20:

05) 初級1A-2 (20:10~21:10)

上級 (水曜10:00~11:30)

オンライン準中級 (月曜18:00~19:00)

*緊急事態宣言解除後は事務所で少人数で実施しています。消毒、パーティション等で十分配慮しておりますが、受講の皆様はマスク着用、換気、手洗い等、ご協力をお願いいたします。プライベートレッスンも実施しておりますので、ご希望の方はご相談ください。ベテラン講師陣がお待ちしております。

コルド・ナターリア (初~中級)、イローナ・パルフェノワ (中~上級)、タチヤナ・スニトコ (初~上級)、ウラジーミル・ボロビエフ (初~中級)

*事務所での教室も再開しています。

問合せ: 日口交流協会事務局

TEL:03-5563-0626 e-mail: nichiro@nichiro.org

お願い

NP0日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらかでも結構です。この度は坂本斐子氏にご協力いただきました。ありがとうございます。

*ご協力頂いた方に小さなロシア関連グッズを進呈中! 振込先: 郵便口座00160-9-66486、加入者: 日口交流協会 連絡先: 日口交流協会事務局 E-Mail: nichiro@nichiro.org Tel:03-5563-0626 Fax:03-5563-0752



ゆかた講習会体験 in 田町リーブラ

安部 花子

8月29日、田町リーブラでの浴衣着付け体験に参加しました安部と申します。和服を最後に来たのはおそらく大学の卒業式だったかな…というくらい超・久方振りではありませんでしたが、以前日口交流協会で開催した茶道講習に参加した際、お友達になったロシア人参加者の方に誘われ、人生初の浴衣着付け体験に参加する運びとなりました。

今回の着付け体験は、「一人でゆかたを着られるようになる」をコンセプトとした講習で、浴衣や着物の説明・着付けのレクチャーを千葉副会長、それをロシア語講師のオク

サーナさんが参加者へ通訳しながら説明していきます。日本人参加者は私ひとりで、そのほか約7〜8名の参加者は全員ロシアの方たちでした。

当日はオクサーナさんと千葉さんが着付けに使用する衣装を準備してくださいました。色とりどりの美しい浴衣や帯を前に、参加者全員のテンションが上がります。どれも素敵でなかなか選べないでいたさなか、「ゆかたは洋服とは異なり、どんな色の組み合わせでも不思議となじんでしまうので、好きなものを直感で選んでも失敗しませんよ」とのアドバイスが。確かにどの色を組み合わせても、不思議と調和がとれて雰囲気が変わります。参加者同士も「その組み合わせ、すごくキレイ!」とお互いにオススメあいながら、各自のベスト・オブ・コーディネートが無事に選定完了。

いざ、着付け講習がスタート。着物の成り立ちや構造の簡単な説明から始まり、裾の位置決めや腰帯の結び方、おはしりの整え方、帯の結び方まで、丁寧に説明が進んでいきます。着崩れてしまった場合の調整方法などのアドバイスもあり、まさにコンセプトどおりのとても実践的な内容です。



ただ各自で説明どおりに着付けをしてみるものの、実際にやってみるとやはりちょっぴり苦戦ぞみ。しかし千葉副会長が参加者一人一人を回って、その人の体形に合った着こなし方を丁寧に説明しながら着付けてくださり、誰一人取りこぼすことなく美しいゆかた姿が完成しました。

ここまでで着付け体験自

体はいったん終了したのですが、せっかくの美しいゆかた姿をこのまま脱いでしまうのはもったいないと、なんとこのまま八芳園へ撮影会に出掛けることに! 素敵な日本庭園で和服を着て撮影会をするなんて、日本人でも七五三や結婚式ぐらいでしか機会のないのですが、ましてやロシア人の友人たちと一緒できるなんて、普通に生活していたら経験できないような非常に楽しい機会でした。ただ単に各自でゆかたを着て集合するのではなく、一緒に着物や帯を選ぶところから始まり、みんなで苦戦しながらも着付けを完成させての撮影会なので達成感もひとしお! 美しい日本庭園を背景に、お互いにテンションMAXで写真を撮り合いながら、存分に浴衣姿を満喫しました。

今回の着付け体験に参加したことで、今まで自分の生活に馴染みの薄かった和服が、少し身近に感じられるようになりました。今後もゆかたを着られそうな機会があったら、是非ゆかた姿でお出かけしてみようと思います。このような機会を企画・準備してくださった千葉副会長、オクサーナさん、本当にありがとうございました。

モスクワ「ムゼイ」巡り・その29

バーチャル版プーシキン美術館 (その2)

大矢 温

今回も前回に引き続き、プーシキン美術館を見学してみよう。今回は「新館」。特に印象派のコレクションが素晴らしい。実はロシアは19世紀印象派の宝庫だ。というのも1874年にパリで第1回印象派展が開催されたとき、フランスでは酷評され、全く評価されなかった。出品作の多くがアカデミー展覧会に落選したものだったためだ。ところが、これらオーソドックスな芸術の世界で認められなかった作品にロシアの大商人たちが新しい芸術の息吹を感じて買いあさった。さらに社会主義革命後に世界的名画の数々が国有化され、ペテルブルクではエルミタージュ美術館、そしてモスクワではこのプーシキン美術館のコレクションとなったのだ。例によってプーシキン美術館の



ホームページのバーチャル版で観賞しよう。

まずは有名ところでファン・ゴッホの「レー医師の肖像」。1枚置いて右側には「刑務所の中庭」も見える。右手奥の部屋にはゴーギャン。「タヒチは不思議の土地、果物を集める」。ドガの名画「青の踊り子たち」もこの美術館にある。教科書にも載っている代表的な印象派の名作、ルノアールの「女優サマリーの肖像」もこのコレクションだ。ちなみに同じ「女優サマリーの肖像」でも、全身像の方はエルミタージュ美術館にある。

3階に上がるとピカソ。「玉乗りの少女」や「アルラカンと友達」など、青の時代の作品が中心だ。(札幌大学地域共創学群教授)

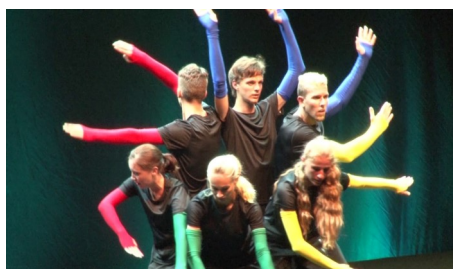


《モスクワ・アラカルト67》

1991年12月に思いをはせて

日向寺 康雄

12月末でソ連崩壊30年となる。私は、あの日モスクワ放送のアナウンサーとして、ピャトニツカヤのスタジオから「ソ連邦が存在を停止した」というゴルバチョフ演説を伝えたが、正直実感はなく又何の恐怖も不安も感じなかった。実際、職場に特別の驚きや緊張感は無かったし、街は静かで不穏な雰囲気もなかった。案外、大事件の只



中では台風の目にいるようなもので、そんなものなのかもしれない。実はあの時、まず私の頭の中を駆け巡った心配は全く別の事…「年明け2月に日本公演するモスクワのデフパントマイム劇団『ゼルカラ（鏡の意）』のメンバー全員に出国ビザが無事下りるかだろうか?」だった。「いやあ困った。それでなくても面倒な手続きがさらに難しくなる」そう思った。メンバーにKGB将校の娘さんがいて、彼女の出国が危ぶまれていた。私にとってモスクワに誕生した世界初のデフシアターの素晴らしさを日本に紹介することは、大げさに言えば青春を賭けた夢であり、私をロシアに送ってくれた若きろう者の友人との約束だった。ありがたいことに、全日本聾唖連盟の後藤勝美文化部長（当時）や奈良のデフパントマイマー芳本光司さんらの深い理解と力強い支援を受け、92年冬の日本初公演はどうやら実現しつつあったのだ。

当初「ソ連崩壊」の意味にピンとこなかった私も、メンバーの出入国準備を進める中で「国がなくなる」とはどういうことかを、嫌というほど知るようになる。とにかく誰と話してよいか分

からないし、責任の所在が明らかでない。その時、途方に暮れた私の相談相手になってくれたのが、当協会の滝波秀子常任理事だった。彼女の温かく親身なアドバイスがなかったら、公演は中止になっていただろう。ロシア側は資金を用意できなくなり、切羽詰まったメンバー達は自家用車を担保に「俠気あるマフィアの親分(?)」から資金を借り航空

チケットを買った。その際、全日本聾唖連盟が借金の保証人となってくれた。一層複雑怪奇(?)になった招待手続きは、滝波さんを中心に交流協会が代行して下さった。成田に一行が無事着いた時の喜びと安堵感は、今も忘れられない。ガラスの向こうで皆、ちぎれるくらい手を振っていた。そして公演は大成功、岐阜では地元ろう者のお宅でホームステイ体験もし、さらには公演各地ではソ連崩壊後の生活を思いやって薬や洗剤、粉ミルクなどたくさんの人道援助物資が集められ、その総重量は何と1トンを超えた。当然、帰りの飛行機では重量オーバーとなった。その時、問題を一つ一つ丁寧に解決してくれたのが、若き千葉麻里副会長その人である。だから協会には感謝の言葉もない。ろう者と私の交流は、その後もずっと続いている。12月6日には岐阜のろう者劇団「いぶき」の公演を見に行く予定だ。嬉しい事にあそこでは、30年前ロシア人達を温かく迎えてもてなしてくれた日本が誇る2人の名女優が、今も舞台で活躍している。

(元モスクワ放送チーフアナ・中大及び早大非常勤講師)

国際放送史研究の戯言No014

グラフ雑誌『ソビエト婦人』

島田 顕

前回、赤沼弘さんのことを書いたことがきっかけで、沢山の方々から感想や情報をいただいた。感謝したい。ところで、赤沼さんといえば、グラフ雑誌『ソビエト婦人』日本語版の編集長。だから今回は『ソビエト婦人』について書きたいと思う。

『ソビエト婦人』は、「ソビエト婦人反ファシスト委員会と全ソ労働組合中央評議会の社会・政治文系月刊誌」として、1945年に第1号が発行された。「反ファシスト」とあるように、大祖国戦争におけるソ連の女性たちを鼓舞し、結集させ、戦いに勝利するためのものだった。日本語版は1956年1月号が創刊号とされている(ちなみに1956年1月号には創刊を表す記事などは一切ない)。この雑誌は、ロシア語、日本語、中国語、朝鮮語、ドイツ語、ハンガリー語、英語、フランス語、ヒンディー語、スペイン語の他、4か国語で発行され、世界120か国に送られていた。

ソビエト婦人反ファシスト委員会の委員長は、元宇宙飛行士のテレシコワ。委員会は1956年に「反ファシスト」の冠がとれ、

「ソビエト婦人委員会」と名乗るようになる。そして雑誌『ソビエト婦人』は、ソビエトの婦人の生活や国際交流を広く各国に紹介し、世界の婦人の友好と発展を強化する雑誌となった。ところで、この雑誌の日本語版は、各国語版に比べ、特に英米独仏版に比べ、発行部数が多かった。また日本語版のグラフ雑誌としては、『ソビエトグラフ』(旧名『ソビエト同盟』)が先に発行されていたのだが、『ソビエト婦人』のほうが読者が多かったようである。それは、日本の女性読者からのお便りを頻繁に紹介していたから。また、60

年代からソ連を訪問する婦人代表団が増え、その紹介記事も発行部数を伸ばすことにつながった。さらに代表団が雑誌を日本に持ち帰って、周りの人たちに紹介したことも部数拡大を促した。

たとえば、1962年11月号の「お友だちの文通」という記事は、1962年1月号に掲載された電話交換手の手紙にたいする返事第2弾で、誌上で手紙のやり取りがさかんに行われていることがわかる。まさに雑誌自体が国際交流の場だった。この雑誌には洋服の原寸大の型紙が付録されている。女性誌であると感じさせるものである。またモードの記事もある。さらに読み切り小説、読者通信、子供向けの童話、料理、医学などの記事も。写真もふんだんに使われており、カラー記事だったたくさんある。号を重ねるにつれて、さらにたくさんの日本人が登場するようになる。有名な人も無名の人も。日本語版を読んでいると、女性を中心とした日ソの交流が活発化していたことがわかる。

私にとってうれしかったのは、記事の著者として、そしてまた翻訳者として、赤沼弘さんや岡田嘉子さん、川越史郎さん、河崎保さん、河崎美智子さん、石井次郎さん、東一夫さん他、モスクワ放送日本語課の先輩たちの名前を見つけることができたことだ。彼らの足跡を追って、活躍を知ることが今を生きる私の使命である。



サンクト・ペテルブルグでのドストエフスキー文学散策

畔上 明

サンクト・ペテルブルクを訪れた人々の多くは、ネヴァ川と数々の運河、そして中心部歴史地区のバロック様式とクラシック様式の建築群のハーモニーの美しさに魅せられ、ロシアで最も心に残る街であったと称えます。

限られた私的な思い出ではありますが、半世紀近く前初めて当時レニングラートと呼ばれた街の散策がその数年前となる中学生時代のドストエフスキー「罪と罰」の強烈な読書体験にもとづくものであっただけに、悪臭と埃舞ううら寂れた横町を見出そうとあえて場末の灰色の景色の中を彷徨ったものでした。

グリボエード運河が湾曲する美しさに目を奪われながら小説の中のS横丁やK橋にたどりついたときは、思わずシャッターを押しまくったものです。帰国後恩師にその写真を見せたところ、角の建物はその2階の一室に朝日新聞ペテルブルク特派員として二葉亭四迷が明治41(1908)年7月から翌年3月まで住んでいたと教えられました。

この一帯は、職人や商人、下級官吏や浮浪者が住む貧しい地域だったそうで、19世紀の中頃に建てられた飾り気のない4.5階建てのアパートが建ち並び、そうした住民を相手にした各種商店や安酒場、大衆食堂、それに娼家が集まっていたとのこと。ピョートル大帝によるサンクト・ペテルブルクのまちづくりとして、海軍省を中心にそこから放射状に道をつくるという計画が進められました。ネヴァ川とは直角に真直ぐ南南東に伸びた道がゴローホヴァ通り、そのゴローホヴァヤを対称軸として斜め左に伸びた道がヴォズネセンスキー大通り、斜め右に伸びた道が繁華街のネフス



二葉亭四迷がいた
ストリャールヌイ横丁13番地

キー大通りです。

デパート、ホテル、劇場、宮殿、教会、レストラン、カフェ、華やかな商店の建ち並ぶネフスキー大通りは表の道であり、ヴォズネセンスキー大通りとゴローホヴァ通り挟まれたあたりは背筋がぞくぞくとさせられる世界、そんな「罪と罰」の舞台を幾度歩き回ったことでしょう。しかし時代と共に街並みは小奇麗になり、ソ連時代「平和広場」と呼ばれ現在は帝政時代のかつての呼称に戻った「センナヤ(干草)広場」の近く主人公が酔いどれマルメラードフと出会ったあたりには洒落たタイ焼きの店が出来たり、S(ストリャールヌイ(指物師))横丁には、ドストエフスキー像が壁に飾られ小説の主人公をまるで実在の人物の如く「ラスコーリニコフの家」という碑が壁に掲げられています。そこからK(コークシキン)橋を渡り730歩先の金貸しの老婆が住んでいた建物の1階には24時間と表示されたスーパーマーケットが現在営業をしているという様変わりです。

さて、時代をさかのぼって18世紀、モイカ川に近い一帯は海運や造船にたずさわる海運省の関係者たちの居住地であったのですが、井上靖の「おろしあ国酔夢譚」で知られる日本人漂流民 大黒屋光太夫が1791年10か月に亘ってのペテルブルク滞在中、娼家を数回訪れたその場所「ペートルボルクの娼家(じょうや)は王居の西の方に一街(ひとこうじ)を隔ててあり」(北槎聞略)がこの界限ではないかと思われるのでした。

(「プロコ・エアサービス」シニア・アドバイザー)

ウズベキスタン便り

寺尾 千之

私は1990年代に2回、2000年に入ってから「ウズベク見聞録ツアー」と銘打ち、事務局長として8回、計10回ウズベキスタンを訪問しています。

今でこそ、TVやSNSを通してウズベキスタン情報が簡単に得られるようになりましたが、一昔前のウズベキスタンへの旅は、多少の不安がつきまとうものでした。1999年にNORIKO学級が創設され、ガニシエル校長との間に太いパイプができたRJCIは、おのずと水先案内人としての役割を担うようになりました。

一般のツアールートにはないリシタンや日本人墓地墓参者のためのバガバードなどが訪問でき、日本語堪能なガニシエル校長がガイドを務め、学級近くの青年センター(2005年、国際交流基金の支援で建設)に宿泊できたこのツアーは、なかなかの人気になりました。ITの普及や鉄道の開通に伴い、自然に役目を終える2011年9月まで、毎回5名前後、延べ40名が参加しました。帰国後、学級生徒を招待した日本語学校、ウズベク伝統布で服を作り、品揃えに加えた「手作り店」オーナー、ムスリム老人と三日月を描いた新作を「銀座和光」の個展で紹介した九谷焼陶芸家、親友・大崎さんの記念碑(写真ご参照)を学級入口に建立した所澤ご夫妻など、彼らのライフワークにも、このツアーは一役買う



ことができたと自負しています。

所澤さんの依頼を受け、ナジロフ・アリジェルさん(リシタン陶芸・第一人者)が、ウズベキスタンの石とリシタン陶器を使って制作した記念碑には「心」の一字が刻印されています。その記念碑に見守られて、子ども達は日本語の歌や可愛い踊りでツアー客を歓迎しています。「こんなに小さな子ども達が日本語の歌を歌い、日本語を話す!」と、涙ぐむ人もいます。文字通り、大崎さんと子ども達との「心」の交流から誕生したNORIKO学級は、ガニシエル校長指揮の下、日ウズ草の根交流発展の原動力となっています。

10回の渡航期間中に、特徴的な異文化体験をほぼ完了した私の密かな楽しみは、目的地へ車で長時間移動する合間を縫っての街角散策でした。初めてNORIKO学級を訪問した2002年3月30日も、早朝散歩を楽しんでいました。すると、土壁の向こうから「コケッココー、モーモー、メエメエ、シャーシャー」と「ブレイメンの音楽隊」のような音が一斉に聞こえ始めました。子ども時代、通学途中に見た家畜小屋の中の牛や、餌をついばみながら路地を歩き回っていた鶏の光景が鮮やかに蘇ってきました。謎だった「シャーシャー」は、「新妻が竹箒で庭を掃く音」と、後日教えてもらいました。「働き者のお嫁さん」を、近所に音でアピールしているのだとか。去年嫁いだノジマさんも、この風習に従い、早朝、庭を掃いているのでしょうか。そのうちに聞いてみようかと思っています。(リシタン・ジャパンセンター事務局長)